

## [報告] 逗子市小坪における1923年大正関東地震と大正津波

### — 紫雲の版画「震後津浪襲来 逗子小坪所見」と『震災津波日記簿』 —

三浦半島活断層調査会\* 蟹江 由紀・蟹江 康光・布施 憲太郎

Wood Block Prints by Shiun “Earthquake Tsunami at Zushi-Kotsubo with the Remarks”  
and the “Yamadaya’s Journal” on the Tsunami and Earthquake:  
1923 Taisho Kanto Earthquake at Kotsubo Beach, Zushi City, Kanagawa Prefecture

Yuki KANIE, Yasumitsu KANIE, and Kentarou FUSE

Research Group for Active Faults in the Miura Peninsula, 405, 2-9-4 Numama, Zushi City, Kanagawa 249-0004, Japan

#### §1. はじめに

2003年、『逗子市史 通史編』[逗子市史 編纂委員会(1997)]の口絵に「小坪津波の図」と書かれた絵を発見した。絵の右下に「紫雲」の署名はあるが、タイトルや出典の記載はない。誰が何を目的として描いたのか、『逗子市史』からは不詳であるが、小坪を襲った1923年大正関東地震(以下、大正地震と記述する)による津波(以下、大正津波と記述する)を描いたものらしい。1)大波に呑みこまれた4艘の和船と3人・倒れた電柱、2)大波から避難する人々、3)朱色に塗られた大規模がけ崩れなどの惨状である。

これと同様の絵が、2011年、防災科学技術研究所自然災害情報室のガラスケース内に、展示されていた。絵の右側にタイトルである「震後津浪襲来 逗子小坪所見」(以下、震後津浪襲来と記す)と画家近藤 紫雲の署名と落款が押された版画であった。2012年に国立国会図書館所蔵で、デジタルデータを入手したところ、この版画は『大正震災画集』の第3集であった。2013年に防災科学技術研究所の「関東大震災90年 1923年関東大震災概要、関連資料:写真」の展示会で、『大正震災画集』全25枚を実見した。

神奈川県逗子市には、大正地震・大正津波に関する写真や石碑などの具体的な被害記録は少ない。逗子市小坪地区における視覚的な記録は、紫雲による版画「震後津浪襲来」のみのように思われる。従って、この紫雲による版画を丁寧に解析すれば、逗子市小坪地区の大正地震直後の小坪の状況を読み取ることができる可能性がある。そのためには、紫雲による版画の作成背景を知ることが必要である。紫雲は逗子小坪に居て、実際にこの大正地震を経験したのであろうか。地震を直接体験した上

での作品であれば、版画に記録されている内容が実際に起きたことに近いものと考えられる。あるいは、伝聞による作者の想像の域であるのか、その知見を得ることができる。紫雲による「震後津浪襲来」の版画には、いくつかの種類が現存する。

一方、2012年に小坪川河口に面する中里町(小坪5丁目)の旧商家「山田屋」(15代目のご家族)から、先代当主(山田康次郎氏)による『震災津波 日記簿 山田屋』を提供していただいた。「震災当日(大正12年9月1日)から12月30日までの復興の記録」である。

本稿では、紫雲の版画から読み取ることができる逗子市小坪地区における大正津波と大正地震の状況と山田康次郎氏による震災体験記録を基に、逗子市小坪の関東大震災の状況を読み取る。

#### §2. 三種類の版画「震後津浪襲来」と『震災津波日記簿』

『逗子市史 通史編』に掲載されている「小坪津波の図」は、版画像の周囲がトリミングされた不完全な画像である。本稿では、これとは別の3種類の版画に着目した。すなわち、逗子市小坪伊勢町(現在の小坪4丁目)在住の個人所有による版画(版画1)、日本版画社から1924(大正13)年に出版された「袋入り」2種類[日本版畫社(1924)](国立国会図書館所蔵)のうちの1枚の版画(版画2)、および東京都慰霊協会復興記念館所蔵の版画(版画3)である。

これら3種類の版画以外に、発行年と発行所が異なる『大正震災画集』が刊行されている。しかし、画集の基本的版の図柄は、ほぼ同様であるので、詳細な記述は省略する。

\* 〒249-0004 逗子市沼間2-9-4-405  
電子メール: okinaebis@mac.com

## 2.1 版画 1

小坪 4 丁目に所在した新藤理髪店の先代 (1900-1953 年) の遺品から発見された版画である (図 1; 図柄の枠内 18.3×21.5 cm)。版画に「逗子小坪」と記載されていたため、二代目の新藤國昭氏が額に入れて理髪店鏡台の上に飾っていたところ、この絵を見た年配の客から「絵を書いた人が店に置いていったもの」と聞いたとのことである。版画は、経年変化で黄色味を帯び、緑色が退色している。白い波飛沫と漆喰の土蔵壁の上から、さらに白色を重ね、今にも津波に呑み込まれそうな幼児の着物に赤色を上塗りし、突然襲来した津波から必死に逃げる様子を再現した、試作品と思われる。背景に描かれた大規模斜面崩壊を起こした飯島と丘陵に位置するがけ崩れは朱色に彩色されている。裏山が崩れた丘陵の家は海前寺 (図 2) で、山門に続く階段には青い袈裟をまとった僧侶 2 名と白い着物の少年僧と思われる人物の姿を確認できる。版画右下の家屋は、後述の「山田屋」と考えられる。

版画の白い土蔵は現存している。図の右枠外には「震後津波襲来 逗子小坪所見」と記入され、右下部に紫雲の署名と落款が押されている (図 1)。

## 2.2 版画 2

国立国会図書館所蔵の「袋入り版画、大正 13 (1924) 年 8 月、日本版畫社發行」[日本版畫社 (1924)] は、「震後津浪襲来」の商品価値を高めるため、大磯附近で転覆した列車の写真をヒントに描いたと考えられる「列車転覆 大磯附近」をセットにして、頒布した。

## 2.3 版画 3

平成 26 (2014) 年 9 月、東京都慰霊協会復興記念館における「状況絵画」として展示されていた「コメント付き」『大正震災畫集』である。

台紙にコメントと版画が糊付けされた絵巻物の形態であったが、その後の展示で、いくつかに分割されていた。版画 3 に付けられた紫雲のコメントを以下に示す。

これは海嘯に襲はれた筆者の實見画であるが、今まで海岸の中腹に透迤として通ってゐた道路の斜面は、山上から一直線に急勾配をなし、路傍に緑の蔭を落としてゐた松樹は海中に陥つて仕舞つた。これは震後五六分急に寄せた激浪の爲めで、第三回目の大濤は三間にも余る大きさに忽ちに繋いだ船を巻き上げ、漁家を潰して更に上へ上へと趁ふて来る。筆者は、その浪音に脅へながらヒタ走りに走って、漸くこの難を脱かれた。その當時を思ひ起こしつゝ認めたので…遠景は江

の島である。(原文の句読点変更と追加)

コメント付きの『大正震災畫集』の奥付に、発刊趣旨が掲載されている。しかし、執筆年月日は空白となっている。以下、発刊趣旨を示す。

大正の震災の惨状…、比実況を具体的に後世に伝ふることの必要を痛切に験せずには居られません。…記念すべき写真や写真版が少なくありませんが…或る時間を経過した後にはカメラに収めたもの…。そこで弊会はその点を考慮し、…体験目撃された所を描写して (紫雲ほか 8 名が) 公にされんことを企てました…各画伯も遺骸の惨状実況を永遠に遺すべく…なりました。震災を記念するのみならず現代風俗画家の…技を味わふべき資料ともなる…。「既に文字を超越し写真にも写すべからざる瞬間における機○の光景も悉く収めて本集に存することは弊会の誇りとする所であります。(原文の句読点変更、…部分省略、カッコ内は著者の追記)

## 2.4 『震災 津波 日記簿 山田屋』

山田屋は中里町 (現在の小坪 5-2) に位置していた。提供された日記簿は、旧山田屋の 14 代当主、山田康次郎氏 (1895-1942 年) による日記簿である。1923 (大正 12 年) 9 月 1 日の被災から 12 月 30 日の店再建までを綴った商家の記録簿である (14.5×20 cm, ほぼ B6 版)。

9 月 1 日は下記のように記録されている (原文の句読点変更)。

一日

朝南風強ク吹き雨降ル。拾時頃晴天トナル。海上誠ニオダヤカナリ。

午前十一時五十六分強震ト同時ニツナミ来リ。地震ハ上下ニ動ク。

前ノ物置、本宅、三号倉庫ノ三ムネ流失シ (商品全部)。

## § 3. 逗子町小坪の震災

### 3.1 紫雲の版画に描かれた場所

大正 10 (1921) 年参謀本部陸地測量部修正測図の 1 万分の 1 地形図「逗子」(軍事機密図) (図 2)、昭和 33 (1958) 年地理調査所の 1 万分の 1 地形図「逗子」と平成 16 (2004) 年国土地理院の 1 万分の 1 地形図「鎌倉」を使用した。震後津浪襲来に描かれている場所の標高は、平成 20 (2008) 年の 2500 分の 1 都市計画基本図逗子市 53-4 により調査を行い、描かれた場所を確認した。

「震後津波襲来」の図柄は、現在の佛乗院の裏山に位置する当時の諏訪神社付近から眺めた光景と、著者らは推定した (図 2, 図 3-2 ; 3-3)。旧諏

訪神社から眺めた写真は、紫雲の版画の構図によく似ている。版画「震後津波襲来」の図柄のうち、朱色に塗られた飯島の斜面と裏山が崩れた丘陵に立つ海前寺は現存する。この構図が確認できる神社は、大正震災のがけ崩れで全壊し、現存の社殿は大正 15 (1926) 年に斜面上部に新造されたものである。

山頂からのがけ崩れで崩壊した飯島の絵葉書(図 3-1)は、大崎の岩礁から撮影された(図 2)。海前寺裏のがけ崩れも明瞭に確認できる。

小坪海岸は、鷺浦(さぎのうら)と呼ばれている砂浜海岸で、その中央に小坪川が流れていた。現在は暗渠に改変されている。川の北西地区は西町と呼ばれていたが、その前面は埋め立地が広がる小坪 5 丁目になっている。小坪川の南東部は伊勢町と南町と呼ばれている海岸であったが、現在は人工的な漁港となり、地番は小坪 4 丁目である。小坪と飯島海岸の地形改変は大規模で、鷺浦の変貌は著しい。

小坪 5 丁目海岸の北西は、埋め立て前には飯島岬(あるいは小坪ヶ鼻)と呼ばれていた岩礁海岸で、飯島地区と和賀江島の岩礁海岸は鎌倉市材木座の砂浜海岸に隣接している(図 2)。

### 3.2 紫雲の行動

版画 3 にある紫雲のコメントから判断すると、版画は紫雲が直接、実見して作成されたと考えられる。

鎌倉の海岸地域では、地震が起きたら「がけ崩れ・地割れの起きない砂場に逃げろ」との伝承がある。実際に「坂ノ下の砂浜の数か所に 50~60 人ずつが海浜に集団避難していた。」(『鎌倉震災誌』[鎌倉町(1930)]の 72 ページ)と報告されている。材木座海岸では、「…海辺へ出たんですが、砂浜は避難した人で一杯でしたよ…」(『世界画報』[小原(1977)]の 61 ページ)との記録が残っている。

小坪でも地震の時に、人々が浜へ避難していたことが知られている。小坪寺(先代の石井 清司)住職がまとめた、小坪の郷土史『鷺の浦考、大震災と小坪』[石井(1981)]の 40-41 ページには、「…激震の襲った直後、人々は海岸に避難しましたが、海の異常な引汐を見て漁師たちは津波の来襲を予知、人々に知らせました。人々は争って、高台や谷戸に向かって避難しました。間もなく予想通り大津波が来襲しました。」(原文の句読点変更。…部分省略)との記録も残っている。

江の島~小坪海岸では、地震後、地割れ・がけ崩れの起きない砂浜に避難し、その後の指示は「区長」が行う。関東震災では、強い引き波を見て津波を予知した。よそ者である紫雲は、逗留してい

る区会の指示に従って、砂浜に避難したものと思われる。「筆者は、その浪音に脅へながらヒタ走りに走って、漸くこの難を脱かれた。その當時を思ひ起こしつゝ認めたので…」というコメントから、紫雲はその後に襲来した津波から辛うじて逃れたことが分かる。

小坪地区は平地面積が少ない谷戸地形からなり、広い平地は、鷺の浦の海浜砂地であった。紫雲は小坪の大正震災の状況を後世に伝えるべく、版画による頒布を試みたと考えられる。

### 3.3 がけ崩れ

地震直後、材木座に隣接する飯島及び、南町と大崎西側で(図 2)、大規模がけ崩れが多発した(『大正十二年九月一日震災教育資料』[三浦郡逗子尋常高等小学校(1923)]の 12 ページ;黒田(1990)の 49-50 ページ)。伊勢町では、その「土埃」で何も見えなくなったと、進藤 國昭氏(元理容店主)は年配の客から聞かされていた(図 1)。山頂からの大規模ながけ崩れで崩壊した飯島は(図 3-1)、現在、ネットフェンスで覆われている。隣接する西町(図 3-2)の海前寺の裏山は、近年に急傾斜地崩壊危険区域に指定され、コンクリートが吹き付けられている。進藤氏・山田氏や紫雲のコメントから、大正地震と小坪海岸に押し寄せた大正津波の情報と被害状況と、当時の住民の意識を読み取ることができる。

### 3.4 地震動と隆起

『震災 津波 日記簿 山田屋』(図 5)の日記簿には、(9月)「1日、…午前 11 時 56 分、強震と同時に津波が来襲した。地震は上下に揺れた(時間には誤差があると思われる。著者の注)」とある。この地震動により、河口に並行していた道路に面する木造の家屋と倉庫 3 棟が流失した。山田家に保存されていた『備忘録』には、建造物の配置図が記入されており、山田美代子氏(山田康次郎氏息子の妻)によれば、配置図にある奥の瓦屋根土蔵 10 坪(33 m<sup>2</sup>)は被害を免れたので商売を始めた、とのことである。日記簿によると、9 月 6 日ころからバケツなどが売れ始め、小坪地域の復旧が始まったことがわかる。当時、山田氏は、白い土蔵に泊まっていたことを、山田美代子氏から伺った。

小坪小学校では、「…突然上下動の大地震が起こって新しい第二校舎を除いて校舎は全壊しました。…」(『逗子市立小坪小学校創立百周年記念誌』[逗子市立小坪小学校創立百周年記念誌実行委員会(1974)]の 61 ページ)との記録がある。

神奈川懸水産會報(1924)によれば、小坪の岩礁は地震で 2-3 尺(約 60-90 cm)隆起、石井(1981)

によれば、「…震災後に海底が 1 m 近く隆起したそうです…」と記述されている。一方、倉持・他 (2015) は、1923 年地震当時の潮間帯を示すカンザシゴカイ科群集の分布高度から、海岸の地震隆起量が約 40 cm であったと見積もっている。

### 3.5 津波の高さ

小坪での大正津波を理解するため、以下に石井 (1981) と『震災 津波 日記簿 山田屋』、その他の口述記録を紹介する。

石井 (1981) によれば、「(津波は,) …小坪の中心、小坪川に向かって押し寄せました。波は伊勢町の魚市場あたりから、一の宮神社 (図 2) 下をさらって小坪川へ突進した。一方西町 (小坪 5-5) からは、…小坪寺の下をさらって、小坪川に突進、川の両側の民家をさらって…小学校下の橋の上まで上がった」(原文の句読点変更。…部分省略、カッコ内は著者の追記) とある。

山田屋は、小坪中里町 (小坪 5-2) で、小坪川河口の標高約 4 m に位置する。日記簿によると、津波は短時間 (地震と同時に) と、記述されているので到達したと思われる。

伊勢町 (小坪 4 丁目) の進藤國昭氏の祖母によると「津波でもっていかれる人を目撃し、電柱につかまって助かった人もいた。一気に海水が引き、浜に魚が多数はねていた。これを取りに行った人が次の波にさらわれた。」(伊東一美博士, 2014 年, 私信) とのことである。

新藤國昭氏によると、「津波は伊勢町の自宅の下 (標高約 5 m) で止まった。」と父親から聞いているとのことである。このことから、小坪川の南側に位置する伊勢町と南町 (ともに小坪 4 丁目) における津波波高は、西町よりいくらか低かったと推定する。

津波の高さを推定するにあたり、逗子市 2008 (平成 20) 年発行の 2,500 分の 1 地形図から標高値を読み取った。正覚寺住職からのご教示、ならびに著者らの現地調査により、小坪西町 (現在の小坪 5 丁目) の津波は、小坪寺 (標高約 9 m)、海前寺への階段上 (標高約 13 m) に到達しておらず、鎌倉市材木座に面する正覚寺の階段の中ほど (標高約 7 m) まで津波が到達したことが判明した。したがって、津波の高さは 7-8 m 程度であったと考えられる。中村 (1924) の 35 ページでは、小坪の津波高さが 7.1 m と報告されている。神奈川懸水産會報 (1924) によれば、小坪の津波の高さは 20 尺 (6.1 m) 以上と記述されている。この数値は、神奈川県地震被害想定調査委員会編 (1985) の記述 6.6-7.7 m とほぼ調和する。

### 3.6 版画 2 の列車転覆図

紫雲は、実見画である「震後津浪襲来」の対照として、想像画と思われる「列車転覆 (大磯附近)」の 2 種類を組み合わせで頒布した (図 4-1)。これは、紫雲画伯が商品価値を意識した、はじめての刊行であったと思われる。大磯付近での事故時の写真 (大阪朝日新聞 (1923) の 16-17 ページ) (図 4-2) を入手し、高い位置から列車を見下ろす構図としたのではなかろうか。版画 1 における「幼児の衣類」や寺社の「額束」に赤色を加筆した。「列車転覆」は、三等車の赤帯を強調し、機関車前部の緩衝装置に、本来なかった「赤色」を加えるなど、セットの版画であることを意識したと思われる。

## § 4. まとめ

### (1) 版画 1 「震後津波襲来」

紫雲は、1923 (大正 12) 年 9 月 1 日、逗子町小坪海岸で大正関東地震に遭遇し、津波に襲われ、一命を取りとめた。この震災の状況を後世に残すため、版画を作成し、小坪の理髪店に試作品を置いてきた。

### (2) 『逗子市史』の口絵

『逗子市史 通史編』の口絵 (1997 年発行) 「小坪津波の図」は、作者の体験に基づいて描かれた作品で後世に伝えることを目的とした『大正震災画集 第 3 集』「震後津浪襲来 逗子小坪所見」という版画であった。

### (3) 版画に描かれた場所と描いた場所

版画 1 の図柄に描かれた場所は、小坪 5 丁目 (西町～飯島) である。紫雲が描いた場所は、小坪 4 丁目 (南町) の旧諏訪神社付近と推定した。

### (4) 版画 2 「震後津波襲来」と「列車転覆」

紫雲は、実見した「地震と津波」を後世に伝えるため、実見画である「震後津浪襲来」と想像画と思われる「列車転覆」をセットにした 2 枚組の版画集を頒布した。この事例を基に「絵巻研究会」は、大正 15 (1926) 年から新たな作品を加え、『大正震災畫集』を編集発行した。コメント付き『大正震災畫集』の木版画は、東京都慰霊協会復興記念館の「状況絵画」として展示された。

### (5) 『震災 津波 日記簿 山田屋』と『備忘録』

逗子町小坪における震災当日の天候、地震発生時間、短時間で到達した津波、建造物と商品の被害状況が記されている。『備忘録』に記載されている奥の土蔵 10 坪 (33 m<sup>2</sup>) は、津波被害を免れたことにより、山田屋と地域の復旧に役だった。

### (6) 地割れとがけ崩れ

小坪海岸では、地震による「がけ崩れと地割れ」の被害を避けるため、「地震が来たら砂場に逃げろ」と代々伝承されてきた。小坪に隣接する鎌倉

の海岸でも同様であった。避難行動は、地域の「区長」が指示していた。

## 謝辞

この報告を作成するにあたり、多くの方々にお世話になり、感謝する。防災科学技術研究所 自然災害情報室・防災専門図書館の堀田 弥生司書、東京都慰霊協会の山口 善正所長・小藺 崇明学芸員、大磯町郷土資料館の富田 三紗子学芸員、葉山町文化財保護委員会会長の伊藤 一美博士には、中世～近世の小坪史を教授いただいた。小坪の新藤 國昭氏には、近藤 紫雲画伯から贈呈された「震後津浪襲来」を提供、震災時の小坪の状況を教えていただいた。小坪の山田 美代子氏には、『震災 津波日記簿 山田屋』、『備忘録』の提供。山田康次郎氏から語られたことを教えていただいた。鎌倉市中央図書館 近代史資料室の平田 恵美研究員は鎌倉の震災資料を提供して頂いた。

対象地震： 1923 年大正関東地震

## 文献

繪巻研究会, 1926, 大正震災畫集, 全一輯.  
石井清司, 1981, 鷺の浦考, 自費出版, 41 pp.  
神奈川県地震被害想定調査委員会編, 1985, 神奈川県地震被害想定調査報告書 (5 津波被害), 神奈川県環境部防災消防課, 446 pp.  
神奈川県水産會報, 1924, 第四号地震号, 11-101.  
黒田康子, 1990, 手帳別冊「関東大震災と逗子」, 手帳の会, 65 pp.

鎌倉町編纂, 1930, 鎌倉震災誌, 鎌倉町役場, 319 pp.  
倉持卓司・倉持敦子・蟹江康光, 2015, 化石カンザシゴカイ科群集からみた大正関東地震における三浦半島西岸域の海岸隆起量, 横須賀市博物館研究報告 (自然科学), 62, 1-5.  
三浦郡逗子尋常高等小学校, 1923, 大正十二年九月一日震災教育資料. 26pp. (謄写印刷, 逗子市立図書館所蔵).  
中村左衛門太郎, 1924, 関東大震災調査報告 (地震篇), 39 図版, 中央気象臺, 61 pp.  
日本版畫社, 1924, 大正震災畫集, 袋入図版 2 枚.  
大阪朝日新聞社, 1923, 大震災寫眞画報, 第二輯, 31 pp.  
小原芳貞, 1977, 体験者が語る大正十二年九月一日 私はこうして生きのびた—誘導者に恵まれて—, 世界画報 復刊, 国際情報社, 304, 61.  
しなのき書房編集, 2014, 写真アルバム 鎌倉・逗子・葉山の昭和, いき出版, 280 pp.  
逗子市史編纂委員会, 1997, 逗子市史 通史編, 918 pp.  
逗子市立小坪小学校創立百周年記念誌実行委員会編, 1974, 逗子市立小坪小学校創立百周年記念誌, 逗子市立小坪小学校, 100 pp.

編者註：本稿は当初「資料」として投稿されたが、査読結果および著者の意向により「報告」へと種別変更された。編集出版委員会で極力論文としての体裁を整えたうえで、ここに報告として掲載するものである。



図1 新藤 國昭氏所蔵の版画「震後津浪襲来 逗子小坪所見」. 蔵の壁に白色が加色されている, 試作品であった可能性が高い. この蔵は現存する.

Fig. 1 A sheet of wood block print of “Tsunami Shuurai Ezu, remarks on Zushi-Kotsubo after the earthquake”.

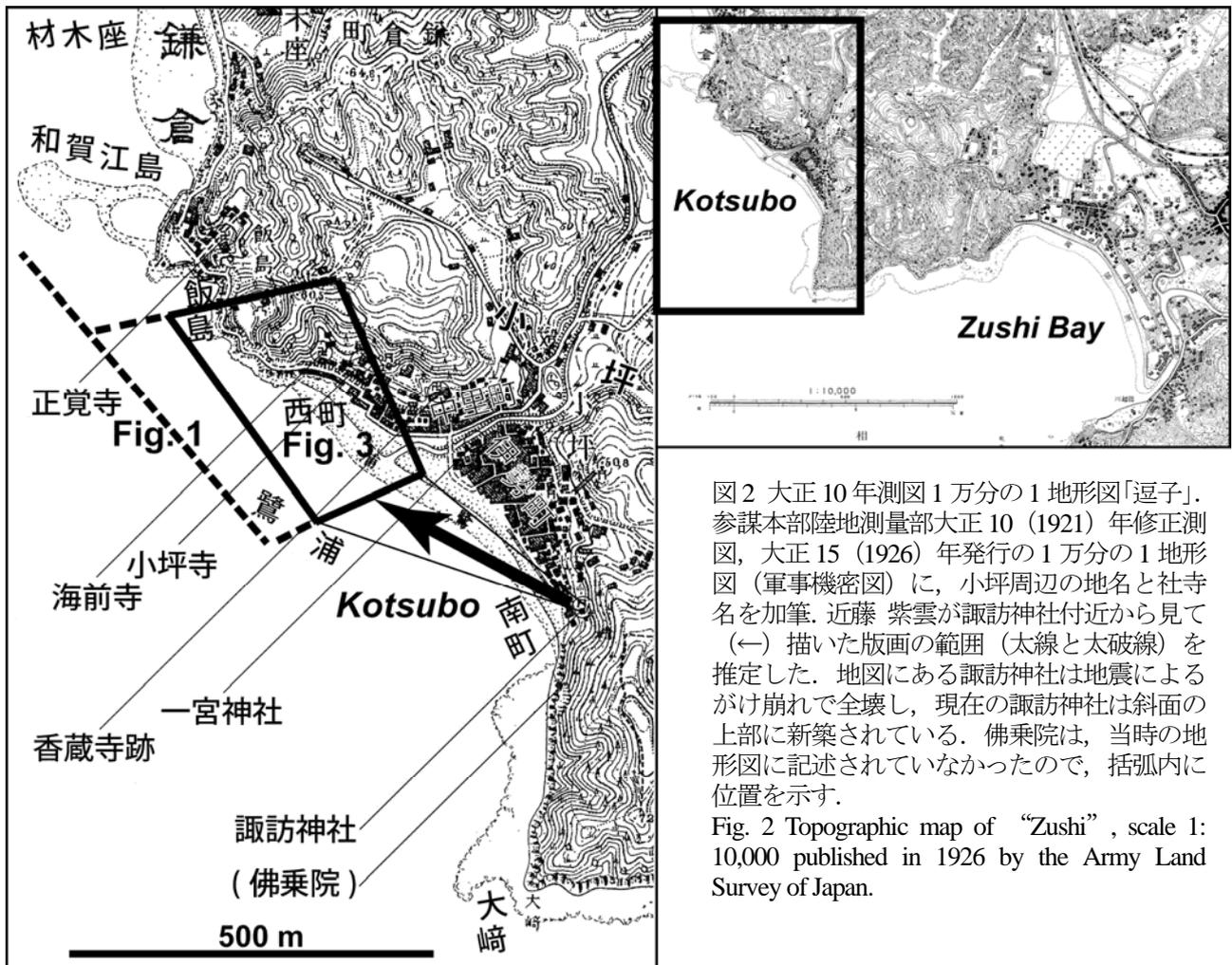
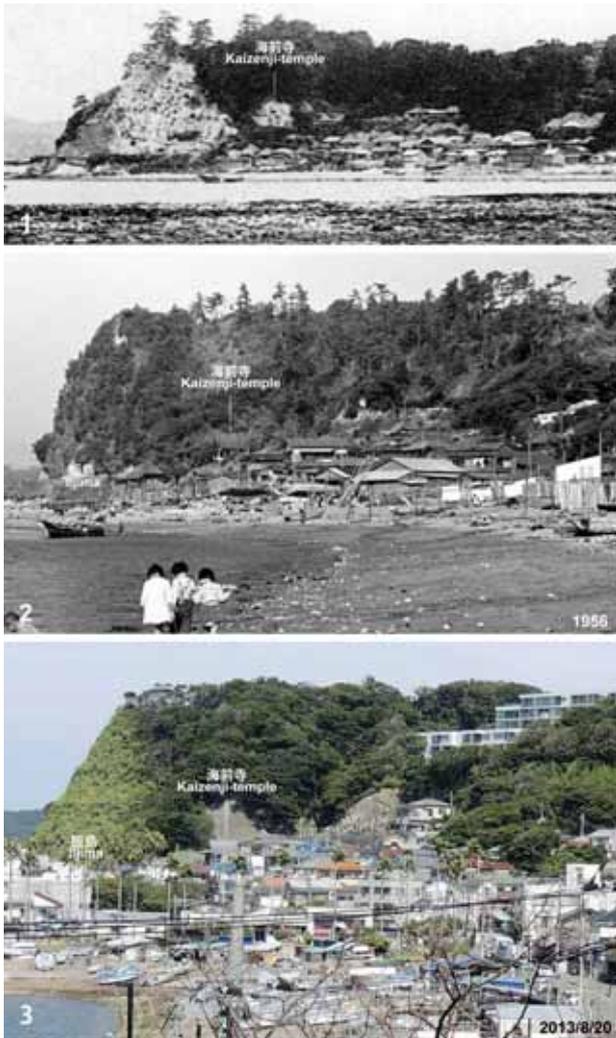


図2 大正 10 年測図 1 万分の 1 地形図「逗子」. 参謀本部陸地測量部大正 10 (1921) 年修正測図, 大正 15 (1926) 年発行の 1 万分の 1 地形図 (軍事機密図) に, 小坪周辺の地名と社寺名を加筆. 近藤 紫雲が諏訪神社付近から見て (←) 描いた版画の範囲 (太線と太破線) を推定した. 地図にある諏訪神社は地震によらげ崩れで全壊し, 現在の諏訪神社は斜面の上部に新築されている. 佛乗院は, 当時の地形図に記述されていなかったもので, 括弧内に位置を示す.

Fig. 2 Topographic map of “Zushi”, scale 1: 10,000 published in 1926 by the Army Land Survey of Japan.



- 図3 小坪地区の飯島～西町，伊勢町。
1. 震災後～1945 年以前（要塞司令部許可済の写真，周囲をトリミング）撮影の絵はがき「小坪海岸ノ風光」。飯島と海前寺裏の生々しいがけ崩れ状況。撮影方向は2・3と異なる。
  2. 飯島と海前寺裏山のがけ崩れ。前景は1956（昭和31）年の小坪海岸（しなのき書房（2014）提供写真）。
  3. 小坪の岩礁は，1967（昭和42）年に埋め立てが開始された。飯島のがけは，道路建設で削られ，傾斜を緩やかにした。海前寺裏山にコンクリートが吹き付けられた。撮影 2013 年 8 月 20 日。

Fig. 3 Landscape of Iijima to Nishimachi, Kotsubo from the Butsujouin Temple in southern area.

図5 『震災 津波 日記簿 山田屋』の表紙。  
 日記簿は14.5×20 cm。大正12（1923）年9月1日に起こされた。ほぼ毎日，簡潔に記録され，12月30日で閉じられた。9月1日の震災前の気象，津波と地震動，津波流失被害の概要が記されている。

Fig. 5 Cover of diary of Yamadaya that describes damages by the earthquake and tsunami.



図4 版画「列車転覆（大磯附近）」。  
 版画（図4-1）は，紫雲が大磯駅東方約1.1kmで，脱線した記録写真（図4-2 [大阪朝日新聞社，1923]）から作図したと思われる。機関車の連結装置を赤く塗ったものは，実存しない。手前に東海道の「松並樹」を配した。

Fig. 4 Overturned train number 74 at Oiso, Tokaido Line.

